

上海のユダヤ入難民音楽家

阿部, 吉雄

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 教授 : 上海のユダヤ人難民

<https://doi.org/10.15017/3418>

出版情報 : 言語文化論究. 22, pp.29-40, 2007-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

上海のユダヤ人難民音楽家

阿 部 吉 雄

1941年12月の日米開戦の時点で上海には約1万8000人のヨーロッパ系ユダヤ人難民がいた。彼らのほとんどは1938年3月のドイツによるオーストリア併合以降、1938年11月9日の水晶の夜事件（ドイツ・オーストリア全土での組織的反ユダヤ人暴動）や1939年9月のドイツ軍のポーランド侵攻を経て、1941年6月の独ソ戦開始までの間にナチスの迫害を受け半ば強制的に移住させられたか、ドイツ軍を逃れてヨーロッパを離れた人々である。その出身国にはドイツ・オーストリア・ハンガリー・ポーランド・チェコスロバキア・ダンツィヒ自由都市・バルト3国など中欧・東欧のほとんどの国が含まれている。

上海のユダヤ人難民についていくつかの統計資料または統計処理の可能な資料が残されている。いずれも1万8000人の難民全員を網羅してはいないが、それらの比較を通して全体像を推測することができる。そのような資料には以下のものがある。

〔統計資料〕

- ・ヨーロッパ系難民救援国際委員会（International Committee for Granting Relief to European Refugees）が行った職業登録の1939年4月15日までの統計^{註1}
- ・ヨーロッパ系難民救援国際委員会が行った職業登録の1940年6月までの統計^{註2}
- ・駐上海ドイツ総領事館の報告（1940年1月）^{註3}

〔統計処理が可能な資料〕

- ・ユダヤ人難民組織が作成した『移住者住所録』（1939年11月）^{註4}
- ・ユダヤ人難民の大部分が生活していた上海虹口東部地区・楊樹浦西部地区を管轄する提籃橋分局特高股が作成した『外人名簿』（1944年8月）^{註5}

これらの資料すべてに難民の職業が記載されており、それを見ると音楽家が多いことに気付く。例えばヨーロッパ系難民救援国際委員会による職業登録の統計では1940年6月までに登録した5120人のうち260人が「音楽家」である。これは「商人その他」の1100人に次いで2番目に多く、「医師」および「帽子製造業者」の各220人、「エージェント」の200人を上回っている。^{註6} 同ヨーロッパ系難民救援国際委員会による1年2ヶ月前（1939年4月15日現在）の統計では3116人の登録者のうち「各種音楽士」が141人。1940年1月の駐上海ドイツ総領事館の報告では1万40人の申告者のうち「音楽家」（男性）が191人、「音楽教師」（女性）が36人で計227人。^{註7} 1939年11月発行の『移住者住所録』では記載された5351人のうち「音楽家」・「ピアニスト」・「歌手」などが計156人。^{註8} 1944年8月に作成された『外人名簿』では記載されたユダヤ人難民1万2309人のうち「音楽家」・「音楽教師」・「歌手」など計146人になる。^{註9}

他にユダヤ人を受け入れてくれる国がなく、やむなく上海へ移住したという事情があったにしても、これだけ多くのユダヤ人音楽家もしくは自称音楽家が上海を目指したのは、1世紀近く西洋人

の租界だったこの街において音楽家への需要が高かったという理由がある。1938年にドイツのユダヤ人向けに出版された移住先ハンドブック『PHILO-Atlas』の上海の項には「チャンスがあるのは言語の知識と資本がある商人、(小編成の楽団を組んだ)音楽家、工業経営者、各産業の技術者や技師」と説明されている。^{註10}

このような音楽家が演奏する場所はバー・キャバレー・ナイトクラブ・ダンスホール・コーヒーハウスなどだった。そのような例として音楽バンドを率いた Eddy Weber や Siegmund Rodman がいた。^{註11} 西川光は『12月8日の上海』の中で「揚樹浦のユダヤ人」という文章を書いているが、そこで太平洋戦争前にユダヤ人難民たちが営んでいたキャバレーを描いている。^{註12} 上海を流れる黄浦江沿いの一角に5、6軒のキャバレーが軒を並べている。(上陸して気晴らしをする水夫相手の店であろう。) 20畳くらいの広さの店内は中央に舞踏場があり、客の相手をする若いユダヤ人娘が4、5人いる。入り口近くの隅が少し高くなっていてピアノとバイオリンとチェロの三重奏を聞かせている。ドイツ風のタンゴを弾いていた楽士たちは日本人の客が入ってくると日本の流行歌を、さらにドイツ民謡やジャズ、ワルツを演奏する。若いユダヤ人娘だけでなく、バンドの生演奏も(娘たちと踊るための伴奏であれ)西洋人の水夫たちを引き寄せる一助になったであろう。このようなバーやキャバレーで演奏した楽士の大部分は、上海のユダヤ人難民の中に多くいたアマチュア音楽家だった。彼らはヨーロッパで習得した本来の職業に上海の経済環境ではつくことができない人々だった。^{註13} しかし中には後述する Erich Marcuse (指揮者) や Arthur Wolff (-1945, ピアニスト・作曲家) のように、2人とも医師でありながら同時に芸術性の高い活動をしたアマチュア音楽家もいた。

上海租界での活動

他方、自分自身で客を呼べるプロの音楽家たちがいて、その中でも秀でて人々は難民社会だけでなく、上海租界の公衆の前で演奏した。言語の違いという障害がある演劇と違い、音楽は聴衆を選ばない点で有利だった。弦楽器奏者を中心に約10人が当時「東洋一」と言われた上海工部局交響楽団 (Shanghai Municipal Orchestra) に採用された。このオーケストラは1922年に設立されたが、その歴史は1879年設立の上海パブリックバンド (Shanghai Public Band) にさかのぼる。ユダヤ人難民たちが上海に到着した当時、団員のほとんどは外国人 (ロシア人・イタリア人・フィリピン人など) だった。^{註14} 上海工部局交響楽団に参加または共演したユダヤ人難民音楽家には以下の人々が含まれる。ワイマール共和国で Ibach 賞を受賞し、上海工部局交響楽団ではコンサートマスターを務め、ソリストとしても登場したバイオリニスト Ferdinand Adler ^{註15}、首席チェリストを務め、ソロでも演奏した Eugen Winkler、ベルリンのユダヤ人文化同盟のオーケストラ出身者でクラリネット奏者の Helmuth Spittel、バイオリニストの Otto Joachim (1910-) ^{註16}、Otto の弟でチェリストの Walter Joachim (1912-2001) ^{註17}、Arnold Schönberg の弟子として優れた作曲家であり、1940年初めからビオラとバイオリンを演奏した Wolfgang Fraenkel (1897-1983) ^{註18}、ピアニストの Marion van Ruyen-Winkler ^{註19}、Miriam Magasi、Robert Kohner、歌手では女性の Sabine Rapp (メゾソプラノ)、Bella Resek (アルト)、Lisa Robitschek (ソプラノ)、Ilse Marcuse (ソプラノ)、男性の Adolf Feuereisen (テノール)、Ernst Krasso (テノール)、Louis Lewitt (バス)、最初招待指揮者として客演し、戦後は常任指揮者として活動した Henry Margolinski。 ^{註20}

難民の一人で音楽批評家の Martin Hausdorff によれば、Henry Margolinski は1939/40年の冬、ロシア人クラブ劇場のオペラ上演も指揮した。またこの劇場で彼はオペレッタの上演において

Leo Schönbach (ー1945)とともに音楽監督や指揮者を務めた。ピアニストの Arthur Wolff はロシアバレエ団のピアノ練習者 (コレペティートル) になった。Erwin Marcus (1902ー1956) は、30年の歴史を持ち120人の団員を擁する合唱団 Shanghai Songsters (雅楽社) の指揮者として活動した。ベルリンで Emil Jannings のサイレント映画での相手役だった Lily Flohr は到着後まもなく上海屈指の Park ホテルで歌手として登場し、6カ国語で歌った。^{註21}

難民社会内での活動

蘇州河北側の虹口東部・楊樹浦西部は1937年の第2次上海事変による破壊が激しく、家賃が共同租界やフランス租界の4分の1になることもあったため、わずか10ライヒスマルクしか持ち出しを許されなかったドイツやオーストリアからのユダヤ人難民たちの多くが住み着き、ユダヤ人町を形成した。^{註22} 後述する理由から演劇俳優たちがすぐには芝居を演じられなかったのと対照的に、音楽家たちは上海到着後すぐに活動を始めた。特にウィーンからの難民音楽家たちは、最も貧しい難民たちのハイムと呼ばれた収容所の講堂、喫茶店、57 Wayside Road (現在の霍山路) の Broadway Theater (本来は映画館) などで毎週のようにあらゆる曲を演奏した。^{註23}

しかし1939年の後半になると、芸術性の低い娯楽性を重視した演芸への不満が募るようになる。このような手軽なショーしか提供されなかった原因は組織・運営上の問題にあった。上海へ移住した音楽家の多くがピアニスト・バイオリニスト・歌手であり、ちゃんとしたコンサートを行うために必要な音楽家の種類と数を揃えるのは容易でなかった。楽譜も不足していた。1939年春に俳優や音楽家らにより芸術家クラブ (Artist Club) が設立されたが、1939年夏に大量のユダヤ人難民が上海に流入して初めて、多様かつ凝縮された芸術活動のために必要な公衆および芸術家の量的基盤がある程度整うことになる。Artist Club に所属する難民芸術家は11月の時点ですでに150人に達していた。Artist Club が企画した最初の催し「我ら、舞台人」(Wir vom Theater) は1939年8月に Broadway Theater で行われた。有名なユダヤ人難民芸術家 (音楽家・俳優・女優・ダンサー) 30人が出演し、その中には上述の Lily Flohr (シャンソン), Ferdinand Adler (バイオリン), Ernst Krasso (テノール), Louis Lewitt (バス), Wolfgang Fraenkel (ビオラ), Henry Margolinski (ピアノ), Erwin Marcus (ピアノ), Leo Schönbach (指揮者) の他に、歌手の Rosa Bershinsky, Olga Heijegg, Irene Margolinski (ソプラノ, Henry Margolinski の妻), Karis Theilheimer, Oki Birkenfeld (ピアノ), Mendel Rezler (ピアノ), 作曲家の Siegfried Sonnenschein (ピアノ) などが含まれる。このような「多彩な夕べ」(Bunter Abend) が1939年だけでもいくつかのハイムの講堂で行われた。しかし日々の生活を過ごすことが精一杯の難民たちの中でまじめなコンサートの入場券を買う人々の数は限られており^{註24}、公演回数にはおのずと限度があった。

1940年1月 Artist Club はヨーロッパ系ユダヤ人芸術家協会 (European Jewish Artist Society, EJAS) に改称された。上海におけるユダヤ人難民芸術家たちの活動が本格的に始まって、彼らの生活は他の難民同様非常に苦しかった。EJAS が1940年6月20日に催した慈善コンサート「芸術家が芸術家のために」(Kuenstler fuer Kuenstler) の広告には収益の一部を困窮した芸術家たちの支援に充てる旨が記されている。EJAS は収入を確保するために演劇およびコンサートの会員を募集した。会員になることで毎月演劇またはコンサートの定期予約席の切符を割安で購入できる制度だった。1940年4月25日の難民新聞 Acht Uhr Abendblatt にはこのシーズンで3回自のクラシックコンサートに Erich Marcuse が指揮者として客演すると報じている。演奏曲目はメンデルスゾーンのスコットランド交響曲とベートーベンのピアノ協奏曲第3番ハ短調だった。

1941年の春以降 EJAS は「オペレッタの真珠」(Perlen der Operette) または「オペラの夕べ」(Opern-Abend) と題して歌曲を一部場面的に演奏するコンサートを開く。^{註25} 同じ時期にオペラやオペレッタの上演も始まったが、多くの困難が伴った。演劇も同じ問題を抱えていたが、それは1) 公演に適した劇場、2) 人員、3) 台本、4) 大道具・小道具・衣装等の不足である。1) EJAS が主催する公演の多くは Broadway Theater や Eastern Theater (144 Muirhead Road, 現在の海門路) で行われたが、これらは映画館だったため舞台の奥行きがわずか1.5メートルで、演じるのに十分なスペースがなかった。その他には上海在住のイラク系ユダヤ人富豪 Sir Horace Kadoorie が難民子弟のために設立した上海ユダヤ人青少年協会学校 (Shanghai Jewish Youth Association School, SJYA または Kadoorie School)^{註26}、以前学校だったため小さな舞台を備えた講堂があるいくつかのハイム (例えば Alcock Road ハイムや Ward Road ハイム)、ユダヤ人クラブ劇場 (詳細は不明) でも公演が行われた。^{註27} 2) オペラやオペレッタを演じるには一定数の歌手が必要であるが、上海の歌手の数は限られていた。そのため俳優や女優がオペレッタに出演した。ユダヤ人難民社会を代表する女優 Jenny Rausnitz (1910-1988) や喜劇俳優の Gerhard Gottschalk (1899-1974), Herbert Zernik, 俳優の Max Günther, Fritz Heller などはオペレッタの常連だった。^{註28} 逆に演劇に歌手が出演することもあった。^{註29} またオペレッタも演劇も毎回出演者の顔ぶれが同じである、後進が育たない等の悩みもあった。3) 上海では入手できる台本の数が限られていた。そのため上海で上演されたオペレッタ27作品のうち5つは上海で制作された。4) 小道具や衣装はそれらを商品として扱う店から借り、プログラムに提供店の名前を記載した。しかしテーブルや椅子が上演当日に初めて届く場合、稽古で正確な動作や位置取りが確認できないという問題があった。

「モーツァルトの夕べ」、「ベートーベンの夕べ」、「シューベルトの夕べ」、「シュトラウスとレハールの夕べ」などが開かれ、メンデルスゾーン、ドボルザーク、チャイコフスキーの曲も多く演奏された。これらのコンサートやオペレッタのプログラムを見ると、いくつかのオーケストラが存在したことが分かる。^{註30} 特に Leo Fuchs, Erich Marcuse, Otto Joachim が率いた難民オーケストラは有名であるが、難民音楽家はバイオリニストが多かったため、他の楽器、特に金管楽器と木管楽器の奏者を集めるのに苦労した。そのような場合、上海工部局交響楽団など他の楽団から必要なメンバーが臨時に雇われた。^{註31} また上海にはしばしばピアノ用の楽譜しかなく、オーケストラ用の楽譜が入手できなかつたり、小編成のオーケストラだったりするために、あらたに器楽編曲をする必要があった。Alben Berg の弟子兼秘書だった Julius Schloss (1902-1973) はピアノ用の楽譜しかなかった『三文オペラ』のオーケストラ用編曲を行った。指揮者の Fritz Prager は上海で上演された27のオペレッタのほとんどにおいて、オーケストラ用器楽編曲を行った。医師でもあった Athur Wolff (-1945) はストラビンスキーの『火の鳥』のオーケストラ用編曲を行った。

合唱団もいくつか編成され、Arthur Wolff, Margit Langer-Klemann (女性コーラス), Heinrich Markt が主宰した。

オペラはマスカーニの『カヴァレリア・ルスティカーナ』やビゼーの『カルメン』などが上演されたが、あまり成功しなかった。その反対にオペレッタは常に人気を博した。これは上海のユダヤ人難民の芸術理解度の問題だけでなく、人々が日中の厳しい仕事を終えた後に、せめて劇場で過ごす数時間の間だけでも楽しい気分を求めたからである。同じ理由で、演劇においても悲劇より喜劇の方がはるかに多く演じられた。しかし娯楽性を重視した公演でも、それにより文化的共同体の意識が強化され、単なる集団としての大衆ではない市民社会的な公衆が形成されたことは、難民社会にとって大きな貢献であったと言える。Fritz Kuttner (1903-91), Martin Hausdorff, Alfred

Dreifuß, Gerti Elias らの音楽学者たちも難民が発行する新聞において批評活動を行い、難民社会の関心を音楽へ向けた。太平洋戦争中も公演は続けられた。

クラシック音楽だけでなく、主にポーランド出身の難民歌手によるイディッシュ語民謡も好まれ、Raya Zomina, Hersh Friedmann, Gretl Kleiner らが人気を博した。彼らの歌はドイツ・オーストリア系難民とポーランド系難民の間の隔たりを埋め、共同体をまとめることに貢献した。

上海にあったアメリカ系のラジオ局 XMHA では1939年5月から日曜日以外の毎日午後4時から5時にユダヤ人難民向けのドイツ語放送を行った。難民の Horst Levin がキャスターを担当し、難民芸術家や知識人も登場し、火曜日には難民音楽家がマイクの前で演奏した。Rosl Albach-Gerstl はこの番組でデビューし、難民社会の人気歌手になった。

難民の聴衆を前に音楽活動を行ったのは音楽家だけではない。オペレッタやコンサートに俳優や女優も登場したことはすでに述べた。ユダヤ教のラビや神学生の中には先唱者と呼ばれる歌手がおり、彼らもユダヤ人難民の音楽生活の重要な一翼を担っていた。その中でも Max Warschauer (バリトン) は宗教音楽だけでなく、EJAS が催す音楽会で世俗音楽も歌った。1939年20人のメンバーによって上海ユダヤ人先唱者協会 (Gemeinschaft Jüdischer Kantoren Shanghai / Association of Jewish Precentors Shanghai) が設立された。翌1941年には先唱者合唱団 (Kantorenchor / Precentors Chorus) が設立され、Jacob Kaufmann の指揮の下、慈善目的のコンサートを開いたりコミュニティ活動に参加したりした。^{註32}

教育活動

難民音楽家たちは公演だけでなく、教育活動も行った。ユダヤ人難民社会の公式機関紙である「ユダヤ会報」(Jüdisches Nachrichtenblatt) の1944年8月25日号には Max Warschauer (バリトン) と Josef Fruchter (テノール) が国立音楽専科学校 (Chinese National Conservatory) に招聘されたことを伝える記事が掲載されている。この音楽学校は1927年に創立された国立音楽院が1929年に改組されたもので、現在の上海音楽学院の前身である。^{註33} 国立音楽専科学校では Wolfgang Fraenkel (上海工部局交響楽団ピオラ奏者、1941年夏から作曲法と音楽理論を教える)^{註34}、Julius Schloss (Fraenkel の後任として作曲法を教える)、Walter Joachim (上海工部局交響楽団チェリスト)、ピアニストの Hans Baer, Erwin Marcus (合唱団 Shanghai Songsters (雅楽社) を指揮)、バイオリニストの Alfred Wittenberg (1880-1952、ピアノも教える)、ソプラノの Irene Margolinski、メゾソプラノの Sabine Rapp (上海工部局交響楽団と共演)、ソプラノの Lisa Robitschek (上海工部局交響楽団と共演)、Ferdinand Adler (上海工部局交響楽団コンサートマスター)、バスの Fritz Philippsborn, Henry Margolinski (戦後上海市政府交響楽団指揮者) なども教えている。

『外人名簿』では38人の音楽家が自らの職業を「音楽教師」(Music teacher)・「教師」(Teacher) または「教授」(Professor) と申告しており、その中には上海工部局交響楽団と共演した Ernst Krasso (テノール)、Bella Resek (アルト)、Sabine Rapp (メゾソプラノ) など第一級の音楽家が多数含まれている。それゆえ、音楽家 (Musician) や歌手 (Singer) などと申告した人々を含め、かなり多くの難民音楽家が個人教授を行っていたと考えられる。^{註35} この教育活動は難民音楽家たちにとって最大の収入源だったからこそ、彼らは『外人名簿』で「教師」と申告したのであろう。しかし他方、西洋音楽を学びたいと望む中国人学生に教えることは、難民音楽家たちにとって娯楽性重視の公演とは違う生きがいを与えたはずである。1953年に東ドイツを訪れた中国の青年楽団はほとんどが難民音楽家たちのかつての学生だったと言う。^{註36}

難民音楽家たちは大学でも教えた。音楽学者の Ida Halpern (1910–1987) は1938～1939年に滬江大学 (1906年創立) で授業を行った。^{註37} Alfred Dreifußは上海大学 (1922年創立) において1941年に音楽史の講義を行った。^{註38} 音楽学者の Fritz Kuttner (1903–91) は1944年夏学期から St. John's University (1879年創立) に招かれ、西洋音楽理論と音楽史を教えた。彼は中国楽器に魅せられ、その後40年以上に渡って中国古代の楽器の発展を調査し続けた。^{註39} 指揮者の Leo Fuchs は音楽理論を教えた。

注

1. ヨーロッパ系難民救援国際委員会は、ユダヤ人難民が上海に到着し始めた1938年8月に Sir Horace Kadoorie や Sir Victor Sassoon など数人のセファルディ系ユダヤ人富豪や、ロシア革命を逃れて上海に移住していたユダヤ人が参加して設立された。略称 I.C. またはその責任者 Paul Komor の名前をとって Komor 委員会とも呼ばれたこの委員会は、難民を到着時に登録し住居や職を探すのを助けた。この職業統計は日本の興亜院華中連絡部の『上海ニ於ケル猶太人ノ状況 (主トシテ歐洲避難猶太人)』(興亞華中資料第102号, 中調聯政資料第2号, 昭和15年1月, 17～19頁) に採録されている。拙稿「上海のユダヤ人『移住者住所録』(1939年11月) と興亜院華中連絡部の『上海ニ於ケル猶太人ノ状況 (主トシテ歐洲避難猶太人)』(1940年1月)」、『言語文化論究』(18), 2003年, 九州大学大学院言語文化研究院, 111～127頁。
2. 「Jewish Refugees in Shanghai」(執筆者不明, 『Oriental Affairs』1940年6月, 292頁) に採録されている。
3. 上海に続々と到着するユダヤ人や以前から在住するユダヤ人について総領事 Martin Fischer がベルリンの外務省へ報告したもの。約1万人のユダヤ人難民がドイツ総領事館で行った届出を基に作成した職業(男女別)と生国の統計リストを含む。拙稿「上海のユダヤ人に関するドイツ総領事館の報告(1940年1月)」, 『言語文化論究』(19) 2004年, 九州大学大学院言語文化研究院, 113～124頁。
4. 『Emigranten Adressbuch』として上海の The New Star Company という出版社から発行され、1995年8月に香港の Old China Hand Press から復刻版が出ている。個人・法人合わせて5351件について氏名, 出身地, 職業, 上海での住所が掲載されている。ほとんどが男性であり, 家計を担う世帯主と見られる。拙稿「資料調査: 上海のユダヤ人『移住者住所録』(1939年)」, 『言語文化論究』(17) 2003年, 九州大学大学院言語文化研究院, 141～157頁。
5. 1943年2月18日, 上海地区の日本陸海軍司令官名で1937年以降に上海に到着したユダヤ人難民に対し, その居住・就業を虹口東部・楊樹浦西部の約2平方キロメートルの地域(俗に言うユダヤ人ゲットー)に限定する布告が出された。この地区を管轄する提籃橋分局特高股が1万4794人の外国人(日本人を除く)についてその氏名, 性別, 年齢, 上海における住所, 職業を記載した『外人名簿』を作成した。Georg Armbrüster / Michael Kohlstruck / Sonja Mühlberger (Hrsg.): „Exil Shanghai 1938-1947. Jüdisches Leben in der Emigration“. Teetz (HENTRICH & HENTRICH Verlag) 2000. 付属 CD に掲載。本稿の著者(阿部)はそのうちの1万2309人がナチスドイツを逃れたユダヤ人難民とその非ユダヤ人配偶者と推測した。拙稿「資料調査: 上海虹口地区『外人名簿』(1944年8月)に見られるユダヤ人難民」, 『言語文化論究』(21) 2005年, 九州大学大学院言語文化研究院, 147～163頁。

6. 以下「簿記係」および「歯科医」が各180人、「家政専門家」160人、「コック」150人、「肉屋」140人、「技師」130人、「保母」・「看護師」および「化粧専門家」が各120人と続く。どの数も10の倍数であり、概数であることが分かる。
7. 夫婦で上海に到着した場合、妻に関しては職業を記入する欄がなかったため、女性音楽家の実際の数はこれよりも多かったと考えられる。
8. 音楽関連の職業および人数は以下の通り。

アコーディオン奏者 (Akkordeonist)	2	作曲家 (Komponist)	5
編曲者 (Arrangeur)	1	音楽家 (Musiker)	71
合唱指揮者 (Chordirigent)	1	音楽教師 (Musiklehrer)	3
バイオリン制作者 (Geigenbauer)	1	音楽教授 (Musikprofessor)	1
バイオリニスト (Geiger / Violinist)	2	ピアニスト (Pianist)	32
宮廷歌手 (Kammersaenger)	1	歌手 (Saenger)	17
聖歌隊歌唱 (Kapelle Gesang)	2	打楽器奏者 (Schlagzeuger)	1
楽長 (Kapellmeister)	12	テノール歌手 (Tenor)	2
ピアノ教師 (Klavierlehrer / -paedagoge)	2	木琴奏者 (Xylophonist)	1
ピアノ調律師 (Klavierstimmer)	3		

9. 他の資料に比べ『外人名簿』における音楽家の割合がかなり低いのは、子供が含まれていることと、戦争中の厳しい経済状態の中で音楽家の仕事が減ったためと考えられる。また「ユダヤ人ゲッター」の設置により、ユダヤ人難民の活動範囲が制限されたことも影響している。David Kranzler: „The History of the Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Dissertation, Bernard Revel Graduate School Yeshiva University, New York 1971, S. 232.

音楽関連の職業および男女別の人数は以下の通り。

	男性	女性	計
音楽家 (Musician)	96	2	98
ピアニスト (Pianist)	2	0	2
バイオリニスト (Violinist)	1	0	1
オペラ歌手 (Opera-singer)	2	1	3
歌手 (Singer)	6	5	11
歌手・俳優 (Singer & Actor)	2	0	2
作曲家 (Composer)	2	0	2
音楽教師 (Music teacher)	14	12	26
イースタン劇場 (Eastern Theater)	1	0	1
オペラプロデューサー (Opera-producer)	1	0	1
ピアノ職人 (Piano worker)	1	0	1
ピアノ調律師 (Piano tuner)	1	0	1
楽器修理 (Repair of musical instruments)	2	0	2

10. „PHILO-Atlas. Handbuch für die jüdische Auswanderung“. (PHILO) Berlin 1938, (Reprint, Philo Verlagsgesellschaft. Bodenheim b. Mainz) S. 42.
11. Wolfgang Fischer: „Von Asta Nielsen bis Sonja Ziemann. Erlebnisse eines Filmreporters“. Berlin 1958, S. 86; アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館のホームページ

- (<http://www.usmmm.org/>) の Photo Archive (Photograph #23005, #23006, #23007)。
12. 西川光：『12月8日の上海』, 泰光堂, 1943年, (復刻版, 大空社, 上海叢書第12巻, 2002年) 207～219頁。
 13. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976), S. 373.
 14. 太平洋戦争中日本軍占領下で上海交響楽団, 戦後国民党政権下で上海市政府交響楽団, 共産党政権下で上海市人民政府交響楽団になる上海工部局交響楽団の歴史については榎本泰子：『上海オーケストラ物語。西洋人音楽家たちの夢』(春秋社, 2006年) が詳しい。
 15. Ferdinand Adler がコンサートマスターになるのは, それまでコンサートマスターだった Arigo Foa が指揮者になってからと考えられるため, 厳密に言えば太平洋戦争中日本軍占領下の上海交響楽団になる。他の音楽家についても, ここでは上海工部局交響楽団によって上海交響楽団・上海市人民政府交響楽団・上海市人民政府交響楽団を代表させて論じる。
 16. Otto Joachim は戦後カナダへ移住し, モントリオール交響楽団でピオラを担当し, コンサートマスターを務めた。当地の大学や音楽学校で教える傍ら, 作曲活動も行った。彼は権威ある『New Grove Dictionary of Music and Musicians』に載った唯一の上海ユダヤ人音楽家である。Universität Hamburg: „Lexikon verfolgter Musiker und Musikerinnen der NS-Zeit“. (<http://cmslib.rrz.uni-hamburg.de/lexm/content/home.xml>); Xu Buzeng: „Jews and the Musical Life of Shanghai“. In (edited by) Jonathan Goldstein: „The Jews of China, Vol. 1“. New York (M. E. Sharpe, Inc.) 1999, S. 232.
 17. Walter Joachim は戦後カナダへ移住し, 兄の Otto Joachim 同様モントリオール交響楽団でコンサートマスターを務める傍ら, 当地の大学や音楽院で教えた。Universität Hamburg: „Lexikon verfolgter Musiker und Musikerinnen der NS-Zeit“.
 18. Fraenkel は裁判官だったが, 1933年ナチスがユダヤ人を公職から追放した後は音楽家として活動していた。1938年11月9日の水晶の夜事件で逮捕され強制収容所に送られ, 釈放後に上海へ移住した。Universität Hamburg: „Lexikon verfolgter Musiker und Musikerinnen der NS-Zeit“.
 19. Marion van Ruyen-Winkler は太平洋戦争開戦前にアメリカへ再移住した。„Acht Uhr Abendblatt“. Jahrgang 3, Ausgabe 44 (25. Februar 1941), S. 4.
 20. Alfred Dreifuss: „Shanghai – Eine Emigration am Rande“. In Eike Midell u.a.: „Exil in den USA“. Frankfurt a. M. (Roderberg Verlag) 1980, S. 499.
 21. Stephan Stompor: „Künstler im Exil, Teil 2“. Frankfurt a. Main. 1994, S. 722 f.
 22. ユダヤ人町と言っても, この地域では1万人弱のユダヤ人が10万人の中国人に混じって住んでいた。
 23. 1939年7月, 1124 East Broadway Road (現在の東大名路) に開店したナイトクラブ Tabarin は毎週変わる演芸ショーで有名だった。Miss Manuela の名前で活躍していた和田妙子も出演していた。上海で一流のナイトクラブで, 租界のすぐ外側の325 Great Western Road (現在の延安西路) にあった Farren's において, Otto Joachim が率いるバンドが彼女の踊りの伴奏をした。和田妙子：『上海ラブソディー。伝説の舞姫マヌエラ自伝』, WAC, 2001年, 224頁。
 24. コンサートの入場者数がどれくらいだったか不明だが, Artist Club とその後身の European

- Jewish Artist Society (EJAS) の責任者だった Alfred Dreifuß は1940年2月に発行された週刊新聞において、上海で演劇を定期的に見るヨーロッパ人は600人だと述べている。Alfred Dreifuß: „Spielplan“. In: „Die Tribüne“. Nr. 2, 3. Februar-Woche 1940, S. 1.
25. Michael Philipp: „Nicht einmal einen Thespiskarren. Exiltheater in Shanghai 1939-1947“. Hamburg (Schriftreihe des P. Walter Jacob-Archivs, Heft 4) 1996, S. 84 f.
 26. 647 Tung Yuhang Lu (現在の东余杭路) にあった。拙稿「上海のユダヤ人難民子弟への学校教育」, 『言語文化論究』(21) 2006年, 九州大学大学院言語文化研究院, 31~39頁。
 27. Alcock Road ハイムは66 Alcock Road (現在の安国路) に, Ward Road ハイムは138 Ward Road (現在の長阳路) にあった。フランス租界の9 Route Doumer (現在の东湖路) の Doumer Theater でも困窮した難民のための救援コンサートが1942年6月25日に行われた。しかしユダヤ人難民の多くが住む虹口・揚樹浦からは離れていたため、この劇場が頻繁に利用されたとは考えにくい。
 28. 彼らはオペラッタだけでなくコンサートの常連でもあった。音楽関連の催しに出演した俳優・女優を含めると「音楽家」の数は優に300人を超える。
 29. 例えば、ユダヤ人に対するナチスの迫害を弾劾する、上海で制作された最大の演劇『マスクがはがれる』(Die Masken Fallen) が1946年に再演された際、主役の Christine 役は歌手の Lily Flohr が演じた。
 30. 例えば1940年11月25日の EJAS による「多彩な夕べ」では Albert Einzig オーケストラ, オペレッタ『ドリーネと偶然』(Dorine und der Zufall) では Leo Schönbach オーケストラ, 1942年7月19日の困窮者救援コンサートでは Erna Kempe オーケストラの名前が見られる。1941年4月19日の「人気コンサート」には Carl M. Winternitz オーケストラが登場した。
 31. Harriet P. Rosenson: „Jewish Musicians in Shanghai: Bridging Two Cultures“. In (edited by) Jonathan Goldstein: „The Jews of China, Vol. 1“. New York (M. E. Sharpe, Inc.) 1999, S. 246 f.
 32. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews - The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 427. 『虹口記憶, 1938 - 1945, 犹太难民的生活 (Reminiscences of Hongkew. The Life of Jewish Refugees 1938-1945)』, 学林出版社, 2005年, 123頁。
 33. 詳しくは, 榎本泰子: 『楽人の都・上海。近代中国における西洋音楽の受容』, 研文出版, 1998年。榎本泰子: 『上海オーケストラ物語。西洋人音楽家たちの夢』, 春秋社, 2006年。
 34. Fraenkel は1945/46年に数回中国交響楽団の指揮をした他, 1947年に南京国立音楽院でも授業を行った。Universität Hamburg: „Lexikon verfolgter Musiker und Musikerinnen der NS-Zeit“.
 35. 先に『外人名簿』について挙げた「音楽家」・「音楽教師」・「歌手」の総数146人には「教師」(Teacher) ・「教授」(Professor) の13人は含まれていない。
 36. Michael Philipp: „Nicht einmal einen Thespiskarren. Exiltheater in Shanghai 1939-1947“. S. 145.
 37. Ida Halpern は太平洋戦争が始まる前にカナダへ移住した。Walter Pass / Gerhard Scheit / Wilhelm Svoboda: „Orpheus im Exil. Die Vertreibung der österreichischen Musik von 1938 bis 1945“. Wien (Verlag für Gesellschaftskritik) 1995, S. 275.
 38. 1941年9月10日に始まった講義は12回行われ, 12月17日に予定されていた講義は太平洋戦争のためもはや行われなかった。音楽以外の分野を含め, 少なくとも16人の難民が上海の大学で授

業を行った。Michael Philipp: „Nicht einmal einen Thespiskarren. Exiltheater in Shanghai 1939-1947“. S. 144 f.

39. Harriet P. Rosenson: „Jewish Musicians in Shanghai: Bridging Two Cultures“. S. 243 f.

参考文献

- 榎本泰子：『楽人の都・上海。近代中国における西洋音楽の受容』，研文出版，1998年。
- 榎本泰子：『上海オーケストラ物語。西洋人音楽家たちの夢』，春秋社，2006年。
- 西川光：『12月8日の上海』，泰光堂，1943年。（復刻版，大空社，上海叢書第12巻，2002年）。
- 和田妙子：『上海ラプソディー。伝説の舞姫マヌエラ自伝』，WAC，2001年。
- 许步曾：「猶太音楽家在上海（上・下）」，『音乐艺术』1991年3・4期，上海音乐学院，（3期）36～43頁，（4期）10～16頁。
- 『虹口记忆，1938－1945 犹太难民的生活（Reminiscences of Hongkew, The Life of Jewish Refugees 1938-1945）』，学林出版社，2005年。
- Xu Buzeng: „Jews and the Musical Life of Shanghai“. In (edited by) Jonathan Goldstein: „The Jews of China, Vol. 1“. New York (M. E. Sharpe, Inc.) 1999. S. 230-238.
- Georg Armbrüster / Michael Kohlstruck / Sonja Mühlberger (Hrsg.): „Exil Shanghai 1938-1947. Jüdisches Leben in der Emigration“. Teetz (HENTRICH & HENTRICH Verlag) 2000. 付属 CD。
- Alfred Dreifuss: „Shanghai – Eine Emigration am Rande“. In Eike Midell u.a.: „Exil in den USA“. Frankfurt a. M. (Roderberg Verlag) 1980. S. 447-555.
- Michael Philipp: „Nicht einmal einen Thespiskarren. Exiltheater in Shanghai 1939-1947“. Hamburg (Schriftreihe des P. Walter Jacob-Archivs, Heft 4) 1996.
- Michael Philipp: „Exiltheater in Shanghai 1939-1947“. In „Zwischen Theben und Shanghai. Jüdische Exilanten in China – Chinesische Exilanten in Europa“. (Oberbaum Verlag) Berlin 1998. S. 157-168.
- Michael Philipp: „Identität und Selbstbehauptung. Das kulturelle Leben im Shanghai Exil 1939-1947“. In Georg Armbrüster / Michael Kohlstruck / Sonja Mühlberger (Hrsg.): „Exil Shanghai 1938-1947. Jüdisches Leben in der Emigration“. Teetz (HENTRICH & HENTRICH Verlag) 2000. S. 147-164.
- David Kranzler: „The History of the Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Dissertation, Bernard Revel Graduate School Yeshiva University, New York 1971.
- David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976).
- Walter Pass / Gerhard Scheit / Wilhelm Svoboda: „Orpheus im Exil. Die Vertreibung der österreichischen Musik von 1938 bis 1945“. Wien (Verlag für Gesellschaftskritik) 1995.
- „Emigranten Adressbuch fuer Shanghai. Mit einem Anhang Branchen-Register“. (The New Star Co.) Shanghai 1939. (Reprint, Old China Hand Press. Hong Kong 1995)
- „Jewish Refugees in Shanghai“. In „Oriental Affairs“. June 1940, Shanghai S. 290-294.
- Harriet P. Rosenson: „Jewish Musicians in Shanghai: Bridging Two Cultures“. In (edited

by) Jonathan Goldstein: „The Jews of China Vol. 1“. New York (M. E. Sharpe, Inc.) 1999. S. 239-250.

Stephan Stompor: „Künstler im Exil, Teil 2“. Frankfurt a. Main. 1994.

„PHILO-Atlas. Handbuch für die jüdische Auswanderung“. (PHILO) Berlin 1938. (Reprint, Philo Verlagsgesellschaft. Bodenheim b. Mainz)

Universität Hamburg: „Lexikon verfolgter Musiker und Musikerinnen der NS-Zeit“.
(<http://cmslib.rrz.uni-hamburg.de/lexm/content/home.xml>)

本稿は平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)「第2次世界大戦時、中国上海に存在したユダヤ人難民社会の実態研究」(研究代表者：阿部吉雄)による研究成果の一部をまとめたものである。

Die Musiker unter den jüdischen Flüchtlingen in Shanghai

Yoshio ABE

Unter den ca. 18.000 jüdischen Flüchtlingen, die vor dem Nationalsozialismus nach Shanghai geflohen waren, gab es über 200 Amateur- und Berufsmusiker.

Diejenigen Amateurmusiker, die in Shanghai nicht mehr in ihren eigentlichen Berufen arbeiten konnten, musizierten in Bars, Nachtclubs, Tanzlokalen und Kaffeehäusern, um sich ihren Lebensunterhalt zu verdienen.

Die besten Berufsmusiker genossen bei den ausländischen Bewohnern der Konzession große Popularität, und etwa ein Dutzend von ihnen, hauptsächlich Streicher, wurden sogar Mitglieder des Shanghai Municipal Orchesters, das damals als das beste in Asien galt. Darüber hinaus traten etliche jüdische Sänger und Pianisten mit diesem Orchester auf.

Auch in der Gemeinschaft der Flüchtlinge waren die Künstler sehr aktiv. So gründeten sie 1939 den Artist Club, der 1940 zur European Jewish Artist Society (EJAS) reorganisiert wurde. Die EJAS veranstaltete trotz des Mangels an geeigneten Spielstätten, Opern- und Operettentexten, Noten, Kulissen, Requisiten, Kostümen und an geeignetem Personal zahlreiche Konzerte. An den Konzerten nahmen nicht nur Musiker, sondern auch Schauspieler teil. Die meisten Flüchtlinge, die am Tag schwer gearbeitet hatten, zogen fröhliche Operetten ernsten Opern vor. Die jiddische und jüdische Musik trug viel dazu bei, die heterogene Gemeinschaft der Flüchtlinge zusammenzuhalten.

Einige Flüchtlingsmusiker lehrten auch am Chinese National Conservatory und an einigen Universitäten. Auch gaben Dutzende Musiker Privatunterricht, um sich zu ernähren.